



1 空き缶に入れる芯作り。世間話にも花が咲く 2 火模様の土台となる鉄管組み。危険を伴うため、互いに声を掛け注意し合って作業を進める 3 パソコンで作成した図面を確認しながら細かい部分まで丁寧に模様をつくる 4 火文字と火模様にオヒカリの缶をつるす。今年は、ちょうど研修で内子町を訪れていた法政大学の学生も協力 5 田んぼへの杭立てには、高校生がボランティアで手伝い 6 9いよいよ点火。直前に降った雨のためなかなか火がつかず、心配そうに見守る

「祭りの準備して待つてるよ」

5カ月以上前から始まる準備。今年の当番「中通り1班」の作業風景を、カメラリポート

6年に1度巡ってくる当番。その仕事は、前年の祭りの後片付けから始まります。無事役目を終えたその年の当番と一緒に片付けを行いながら苦労話やアドバイスに耳を傾けるうちに、おのずと翌年に向けての心構えができてきます。

図案は、当日までほかの班は一切秘密です。本格的な準備は7月から。若い人たちはまず、火模様の土台となる鉄管を組みます。その幅約22cm、高さ約12cm。組み上がった鉄管に、図案に基づいて鉄筋を張っていきます。

その間に、女性や高齢者たちはオヒカリをとす空き缶や芯の準備。缶をつるす杭を立てるときには、毎年地元の高校生がボランティアで協力してくれれます。祭りの前日は、当番全員で缶つり作業。当日は、午後6時から点火。雨よけのためのビニールを外し、祭りの成功を願いながら一つ一つオヒカリをとまします。すべての明かりがともったとき、観客の歓声を聞きつつ、ようやく当番の人々は肩の荷を下ろしました。



●当番の務めを終えて

「フレカタ」
ひでよし
藤岡秀吉さん



フレカタとは、連絡係の役割を担う人のこと。あわせて、現場での作業の取りまとめなども行います。藤岡さんは「当番が巡ってくると班の住民は本当に大変。でも中通り1班には若者も多く、みんながよく動いて協力してくれるのでとても助かった」と感謝。

「宿」
むつき
大田陸紀さん(左)、学さん



「初めてで分からないこともあったが、先輩方に教わりながら何とか無事に務めを果たせた」と、ほっとした様子の大田さん。今は町外で生活する学さんも日曜日ごとに戻って手伝い「思ったより大変だったけれど、地元の人と話ながらの作業は楽しかった」と話していました。



当番「中通り1班」の人たち。祭りの翌日、後片付けが終わりすすだらけの顔のまま、晴れやかな笑顔を見せる